樽前山の火山活動解説資料（令和８年10月）

札　幌　管　区　気　象　台
地域火山監視・警報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。
なお、山頂溶岩ドーム周辺では高温の状態が続いていますので、突発的な火山ガス等の噴出に注意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図１、図２-①～⑥）

監視カメラによる観測では、各火口や噴気孔群の噴気の高さは概ね火口縁上100ｍ以下で経過しました。噴気の高さは2021年秋頃にやや増大し、現在もその状態が継続しています。

・地震及び微動の発生状況（図２-⑦～⑨、図３）

火山性地震は少なく経過し、震源は山頂溶岩ドーム直下の深さ０km付近に分布しました。
火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図４）

GNSS連続観測では、火山活動の高まりを示すような変化は認められません。

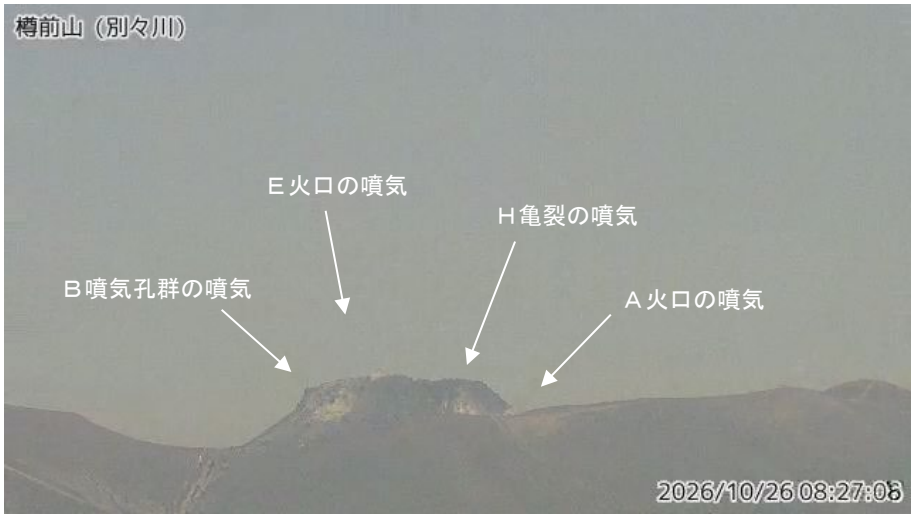


図１　樽前山　南側から見た山頂部の状況（別々川監視カメラによる）

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。
資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』、『数値地図 25000（行政界・海岸線）』及び『基盤地図情報』を使用しています。
次回の火山活動解説資料（令和８年11月分）は令和８年12月８日に発表する予定です。

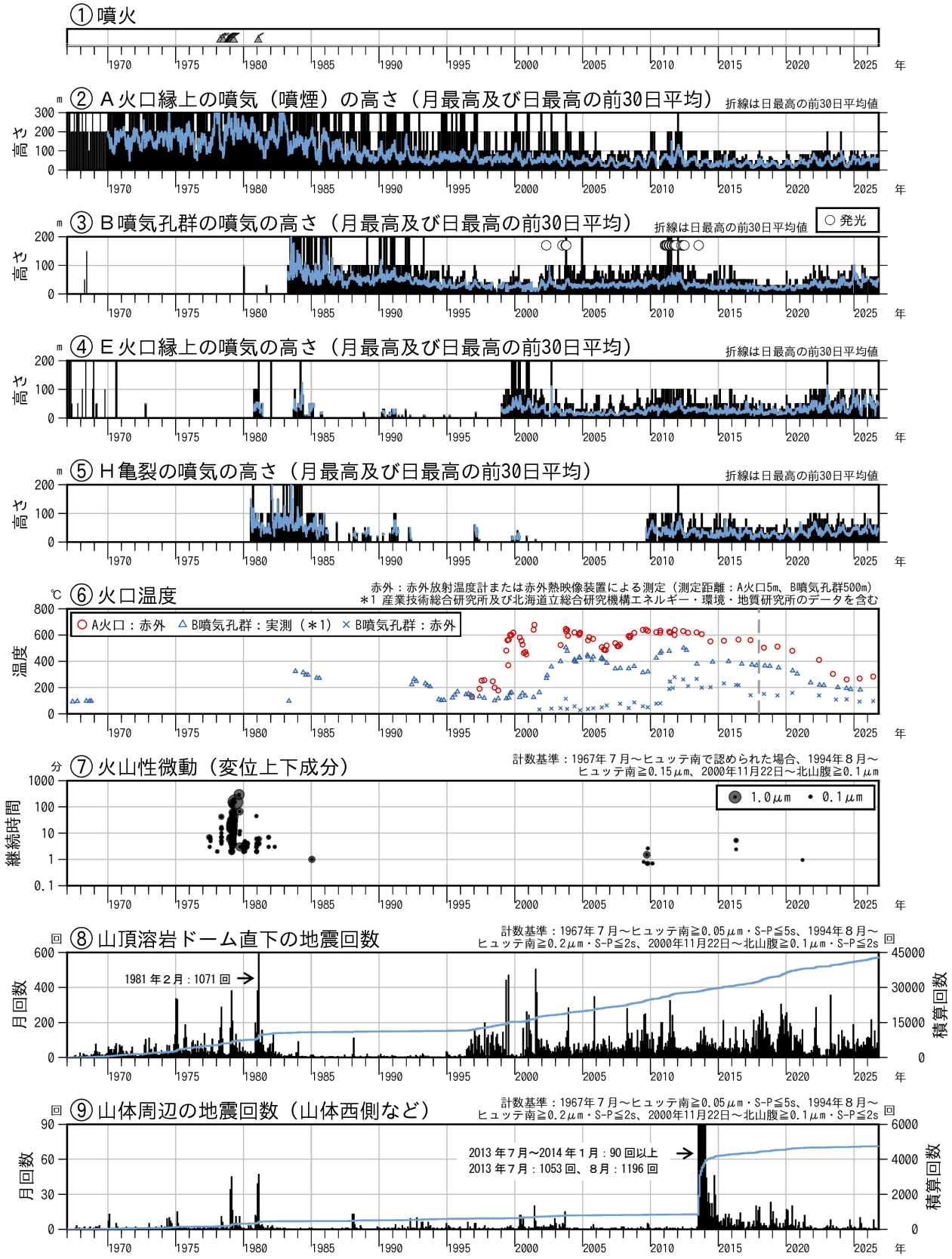


図２　樽前山　火山活動経過図（1967 年１月～2026 年 10 月）

⑥：2018 年（破線）前後では測定機器の変更により、測定温度に差が生じている可能性があります。
⑧⑨の棒グラフはそれぞれの基準で計数した火山性地震の月回数、青色の折れ線は積算回数を示します。

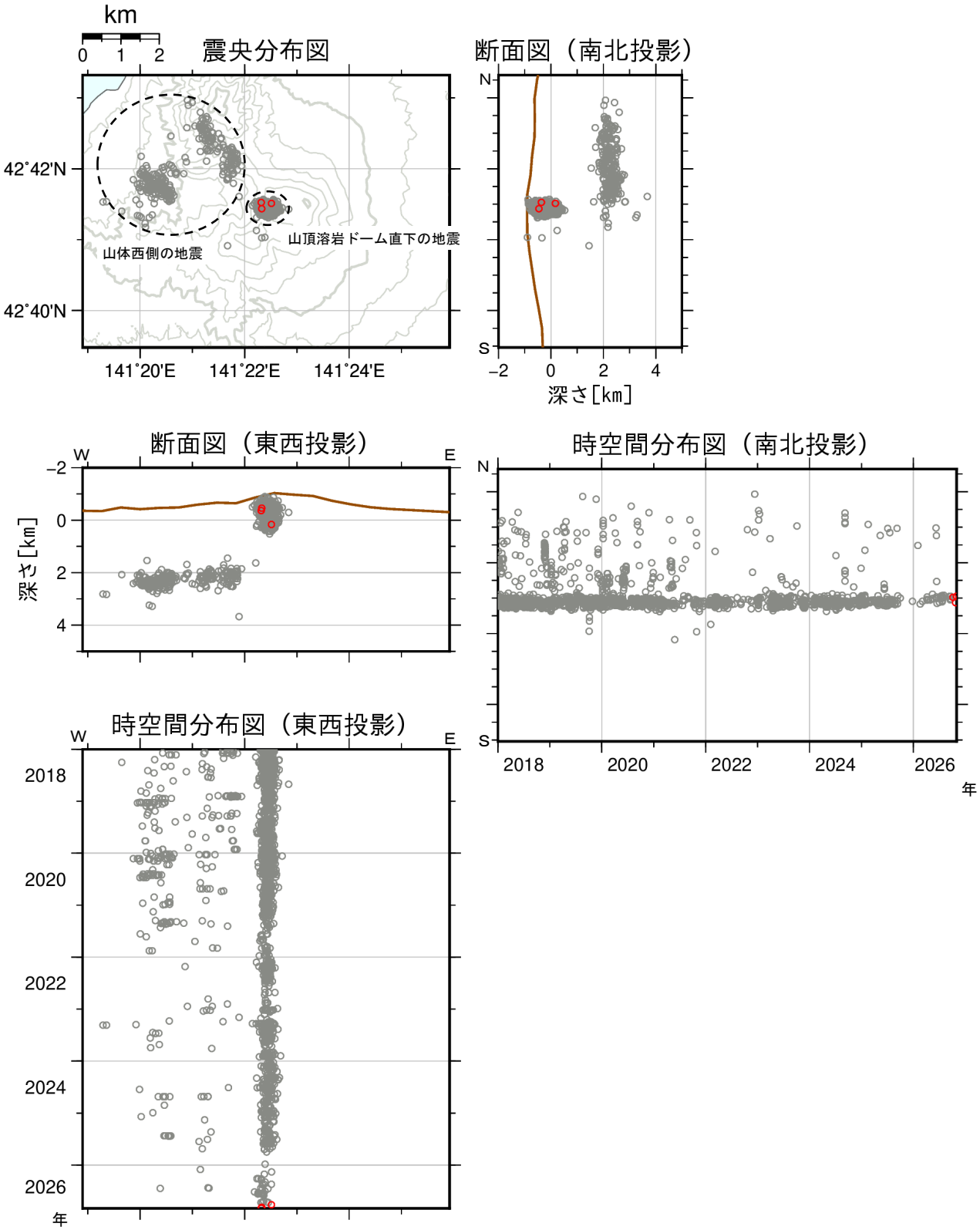


図３　樽前山　火山性地震の震源分布（2018年１月～2026年10月）

○：2018年１月～2026年９月の震源　○：2026年10月の震源

2025年10月頃以降、一部観測点の欠測のため、震源の求まった数が減少しています。

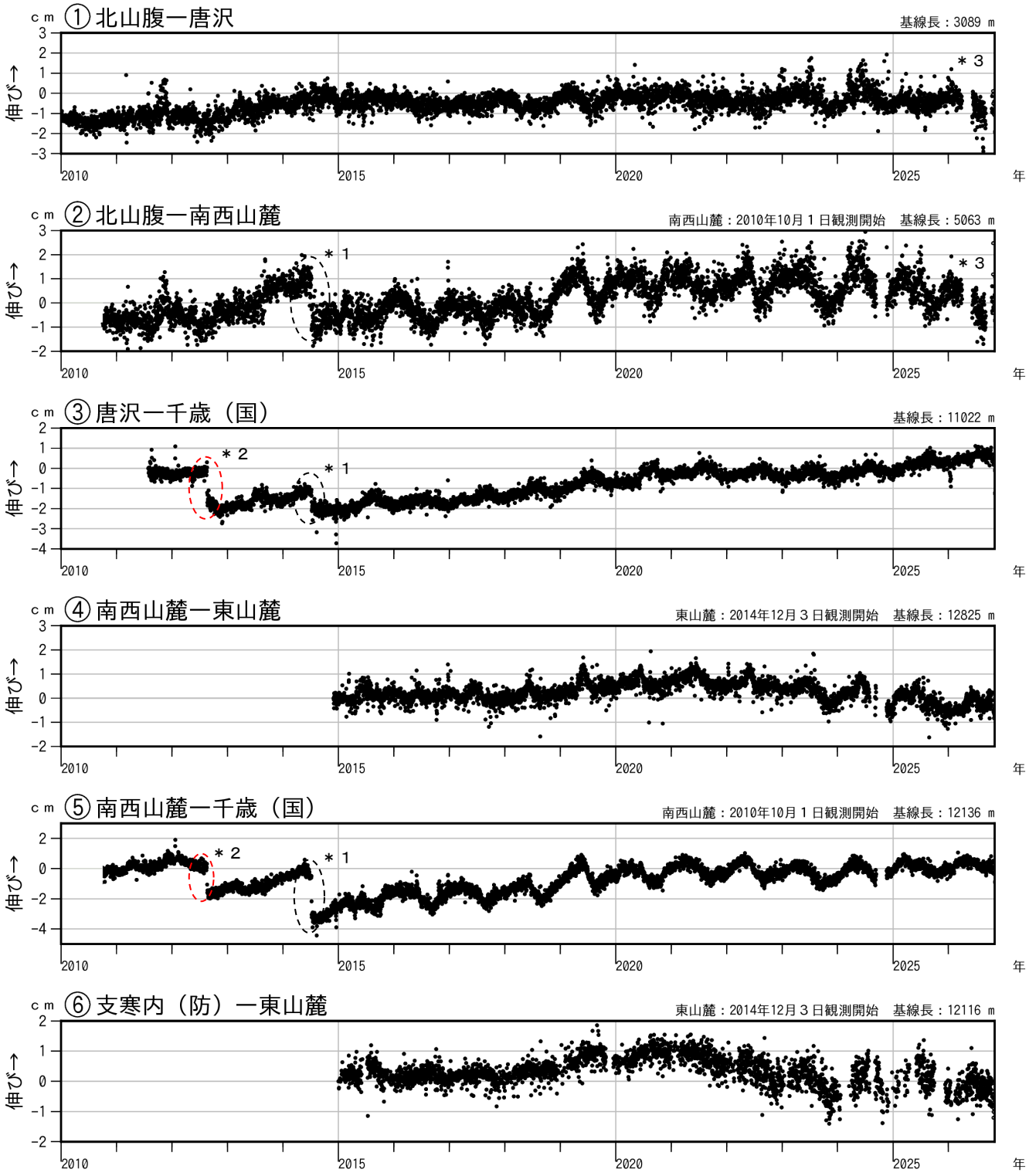


図4-1　樽前山　GNSS連続観測による基線長変化（2010年１月～2026年10月）

グラフ①～⑥は観測点配置図（図4-2）の基線①～⑥に対応しています。
グラフ中の空白部分は欠測を示しています。
＊１：黒破線内の変動は2014年７月８日に発生した胆振地方中東部の地震によるものです。
＊２：赤破線内の変動は機器変更によるものです。
＊３：①②の2026年３月以降みられる縮みの変化は、北山腹観測点に起因する変化と考えられますが、原因は不明です。

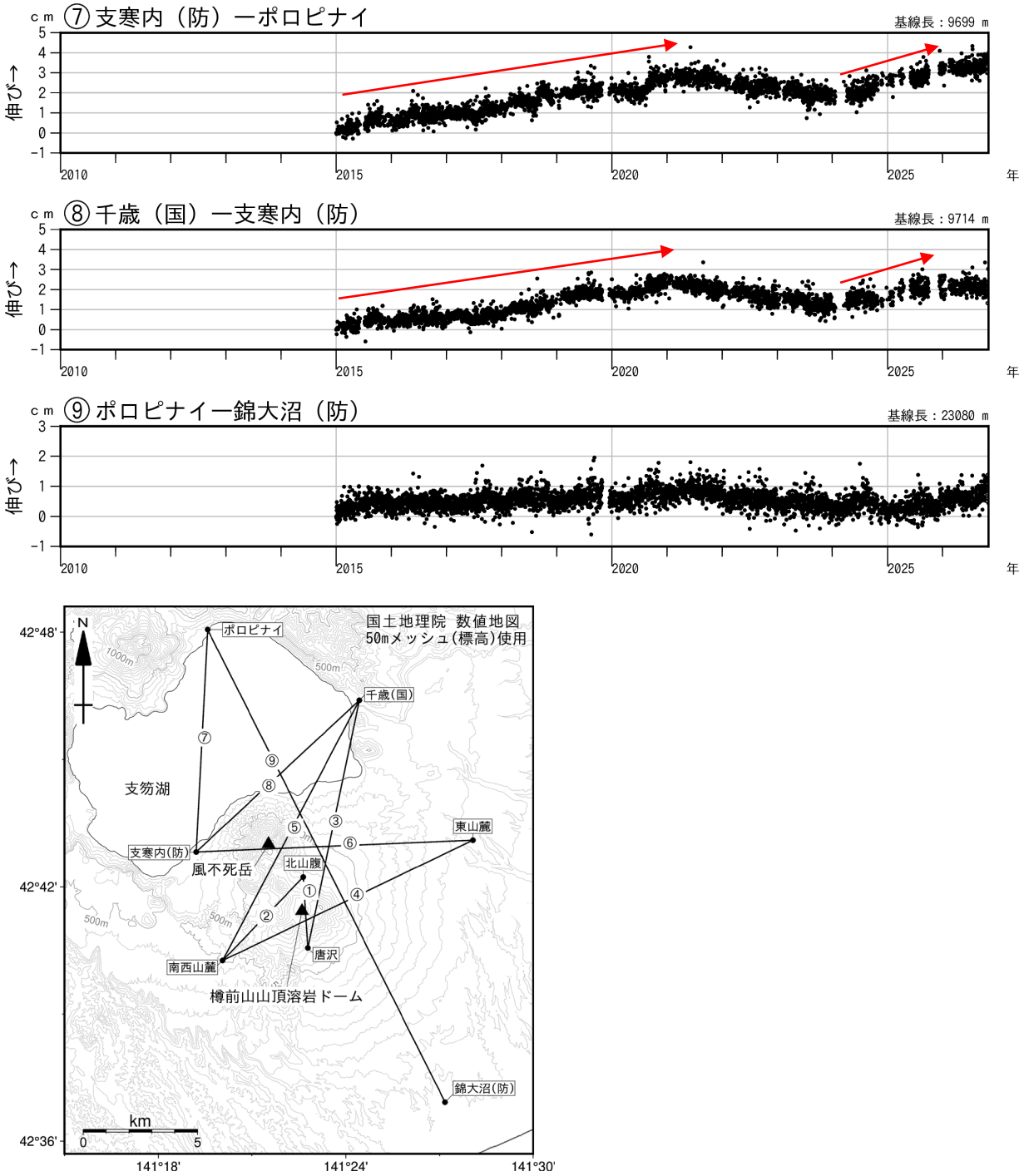
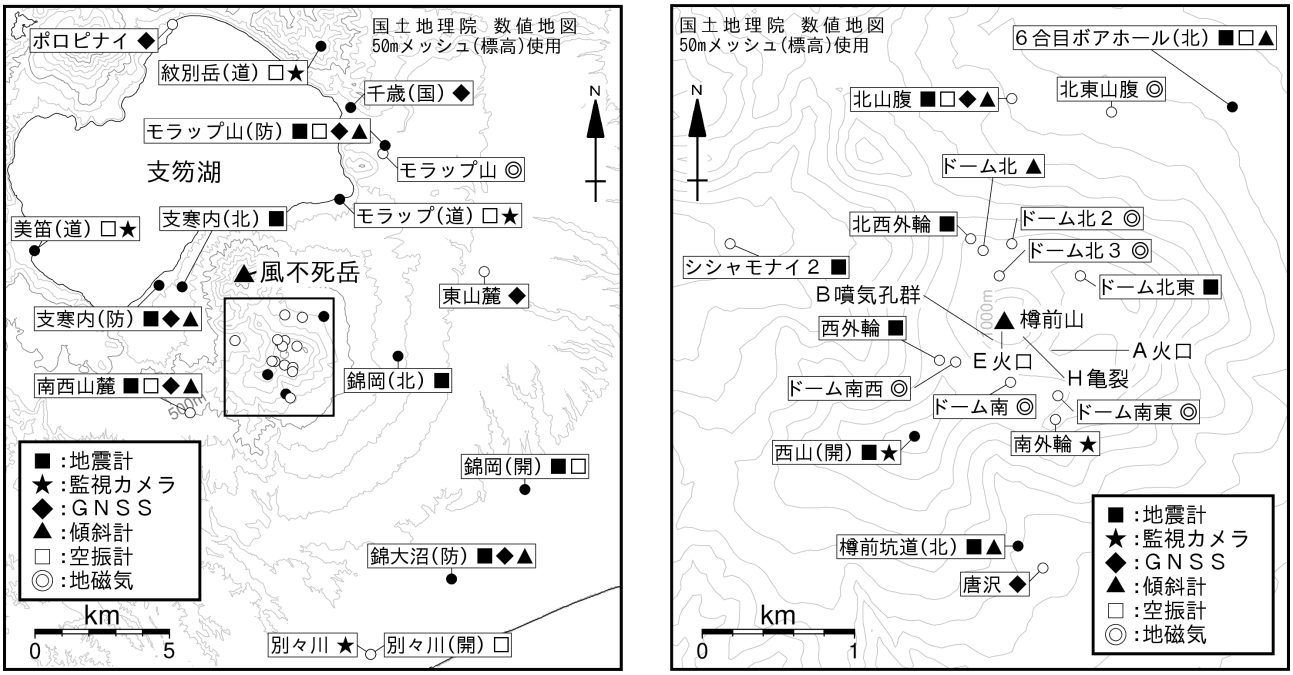


図4-2　樽前山　GNSS連続観測による基線長変化（2015年１月～2026年10月）及び観測点配置図
グラフ⑦～⑨は観測点配置図の基線⑦～⑨に対応しています。
グラフ中の空白部分は欠測を示しています。

・支笏湖周辺を挟む一部の基線（主に基線⑦⑧）では、数年程度継続するゆるやかな伸長が時々認められます（赤矢印）。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。左図中の四角囲みは右図の表示範囲を示します。
(開):国土交通省北海道開発局、(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道

図５　樽前山　観測点配置図